

るの は な

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同 窓 会 報 編 集 部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉(0472)22-7171内線208

千葉大学医学部同窓会報 第58号 題字 鈴木 五 郎

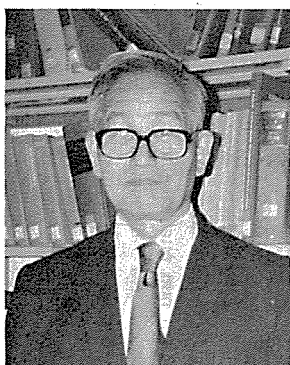
岡林 篤教授 松本 胖教授

合同退官記念式典開催される

前号(五七号)に報告した通り、岡教授の退官記念式典は去る三月二十七日午後一時三十分より医学部記念講堂で行なわれた。前日来の大雨は午前中であり、懸念された一部学生の妨害もなく、岡教室門下生医学部教官等約四百余人が集まり、厳粛に行なわれた。先づ井出源四郎医学部長代理の挨拶にはじまり、るの は な 同窓会大塚文郎会長の祝辞、岡教室を代表して近藤洋一郎第二病理助教、野沢栄司神経精神科講師の謝辞、次いで記念品、花束の増呈が行なわれ、最後に岡教授の挨拶があった。岡林教授は昭和三十一年に千葉大学医学部に着任され、二十一年間に免疫病理、アレルギー疾患ことに膠原病の解明、遷延感作の実験等輝やかしい業績を残され、幾多の立派な門下生を育成された。健康にもめぐまれ、今後も残された研究を続けると自信の程を示された。松本教



松本 胖教授



岡林 篤教授

授と本学の関係は父君高三郎学長以来のものであり、親子二代にわたり神経精神医学を専攻された因縁であり、人生の大半は千葉大学と共に歩み、多くの足跡を残さ

代の看護学部長として同窓部の建設に努力されるわけで、先生の御活躍には期待される面が多い。記念式典が終わって東京大学教授(海洋研究所)奈良紀章博士の、関東周辺の海底についてと題する記念講演があった。日頃医学にばかり取り組んでいる者にとつて、か、分野で我々の日常生活と極めて近い研究が行なわれていることに驚き、興味深く拝聴した。ついで記念講堂のホワイエでパーティーが行なわれた。空もからりと晴れて、記念講堂の外は春爛漫、内は立錫の余地のない程の盛況で、岡先生を囲み歓談、永年の労に謝しつつ、午後五時過ぎ散会した。

学長選挙の日程決まる

投票日 六月十七日

相磯和嘉現学長の任期が六月一ばいで満了となるため、千葉大学の次期学長の選挙が左記の日程で行なわれることとなった。

◎五月20日 学長選挙実施日時・場所等の公示・通知

◎6月3日 学長候補適任者推せんめ切、選定委員会委員選出め切

◎6月9日 学長候補適任者(五名)の選定(選定委員会)

◎6月17・18日 学長選挙

なお学長選挙の方式は前回の選挙規定どおり行なわれる予定であり、五月二十四日に医学部としては香月秀雄部長を学長候補適任者として推せんすることを決定した。

るの は な 同 窓 会 新 会 員 歡 迎 会

三月二十三日(木)千葉大学の合同卒業式が県体育館で行なわれた後、医学部卒業生は医学部記念講堂で、井出医学部長事務代理から一人一人卒業証書を受取り、終つて記念撮影に引続き、ホワイエでの恒例の新会員歓迎会に出席した。新卒業生は九十六名であり、そのうち式に出席した九十一名全員が参加した。詰襟の学生服、羽織袴の男子、晴着姿の女子卒業生に、来賓、父兄、教官も加わってさしものホワイエも狭いばかり、萩原常任理事の司会により、井出医学部長事務代理、大塚同窓会長の挨拶(別掲)の後、新卒業生を含めてマイクが手から手へと渡され、例年以上に盛会であった。

挨拶 “新しい同窓会員を迎えて”

千葉大学医学部のるの は な 同 窓 会 長

大塚 文 郎

諸君は長い間の困難に耐えて、こ、に卒業の栄光の日を迎えられて、定めし感慨と感激とに堪えないものがありましよう。

諸君の今日在るを、祈りにも似た、いや祈り続けながら待ちあぐんだ、御両親、御一族の方々の微笑みと安堵の面影が、私の眼前に髣髴として浮んで来ます。ほんとうに、心からお目出度うと申さずには居られません。

るの は な 同窓会は、文字通り只今卒業式を終えたばかりの、新進そのものの同志諸君を迎えて、ひととき新しい力を得ましたことは、この上ない喜びであります。

私共同学同門の士の集りである同窓会の目的としては、会員相互の親睦と、会員の向上発展と、会員の医道昂揚とがうたわれています。之等の目的を実現するには幾

多の方途がありましようが、何と言つても、私共の近代社会生活に欠くことの出来ない情報の活用、の場として位置づけることが最も合理的ではありますまいか。もとより、この情報源としては、単に医学医術に限られることなく、また直接医師達に関連した事柄にとどまることなく、社会の各方面に亘る情報、各人、各々の分野に亘る情報とか、いわゆる識者とか情報機関等によって提供網羅されるべきであることは勿論であります。こうして、情報の豊かさとか広範囲とか、同時多数活用等を考えると、私共にとって、同窓会が情報センターとして、一番ふさわしいのではないかと考えられます。殊に前に述べた通りの会員の集りであつてみれば、この上ない身近な場所として、おのづから、

“獅鷹鷹目行以女子”の扁額 が医学部長室に掲げらる

昨年行なわれた医学部百年祭を記念し、元千葉大学教授淺見喜舟先生の書になるこの語句の扁額がこのほど立派に完成し医学部長室に掲げられた。(写真)

これを機会に編集委員が国立千葉病院院長鈴木五郎先生を訪問し、この語句のいわれをうかがって来た。

「これは千葉医科大学初代学長の三輪徳寛先生が外国留学から帰ら

獅鷹鷹目
行以女子

千葉大学医学部創立
百周年記念に寄せて
浅見喜舟

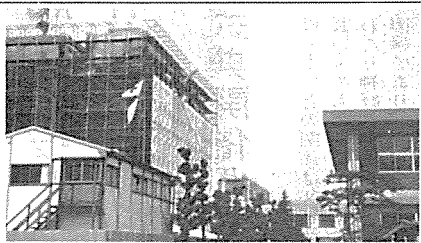
“看護学部”新築中 生物活生研究所も亥鼻台へ

昨年発足した看護学部の第一回生六十名の進学コース(西千葉地区)における教育は九月で終り、十月からは亥鼻台で学部教育が行なわれることとなった。そのため二、四〇〇平方米六階建の“看護学部”が医学部本館、生化学教室に隣接して目下建築中である。

竣工を予定されている九月までの間は、松本胖部長をはじめとす

る看護学部の教職員には、記念講堂の会議室(北側二室、南側一室)をお貸しすることとなっている。

なお、生物活性研究所(新井所長)も近々移転して来る事が本決りになったため、亥鼻地区には二学部一研究所が統合された形となり、今後の在り方は仲々複雑なものとなろうが一面発展も期待できよう。



看護学部化学教室
進館(昭和51年5月)
左は工図書

敬され、大事にされるよう日頃から努力しなくてはならないことを教えていると思われる。この語句を千葉大学医学部の建学の精神にして欲しい」と鈴木先生はいわれた。この意味において部長室にこの額が掲げられたことは意義あることである。

なお鈴木先生の国立千葉病院のお部屋には三輪先生が七十二才の時左手で書かれた色紙を壁掛にしたものが飾ってある。また第一外科医局にもこの語句の立派な額があるが、これは山形県鶴岡市に在住しておられた書家の松平穆堂氏の書になるもので、昭和十年頃に書いたものである。

最後にこの出典は
「Ein Doktor muss ein
Falkenauge, ein
Jungferhand und ein
Löwenherz haben;
を誰かしら邦訳したものと云われる。

（前頁よりつづく）

親近感と友情とが醸し出されて、和やかな雰囲気の中に衆知が集められて、問題の解決の緒口とか処理の方向とかが模索され見出されるのではありませんか。わが同窓会としても会合、集会等が催され又会報等が発行されていることが、この主旨に副うためには、もう少し施策の強化拡充が、一段と要請されてやまない実情にあります。

次に諸君に要望されることは、同窓会に溶けこむことであります。それは同窓会に親しみ、同窓会を愛し、同窓会を育てることに徹することであります。この点についてでも亦、会員の一層の熱意と努力とを希念してやみません。折由來、医師とか、弁護士とか、芸術家とか、いわゆる自由業に在る人々は、ややもすると、組織体になじみづらく、いや、むしろなじもうとしないでこれを度外視し

、自負を棄てることなく、謙虚に会の本質と使命とを理解し銘記すべきであります。

この同窓会が、私共会員にとつて、敬愛される医師として、将又良識ある社会人としての自己形成、自己開発に寄与すると同時に、私達の日常生活の一つの拠点として期待されることが最も望ましい同窓会像ではあります。同窓会をこう考えてきますと、会員の一人一人が、さきの三自の精神を胸の灯として消すことなく、お互いに腕を組み合い、肩をたたきあいながら、るのな同窓会の真の姿の実現に一層努めようではありませんか。

諸君の御健闘を心から祈りながら、私の御挨拶を終わります。

(昭和五十一年三月二十三日)



東京女子医大消化器病センター所長

中山恒明教授退任記念会

中山恒明教授は昭和九年千葉医大の卒業であり、昭和二十二年に瀨尾貞信教授のあとを継がれて第二外科の教授となられた。その後昭和四十一年に東京女子医大に招かれ、極めてユニークな消化器病センターを設立され今日に至ったのでありますが、この三月で退任され同センター名誉所長となられました。

その退任記念会が、去る三月二

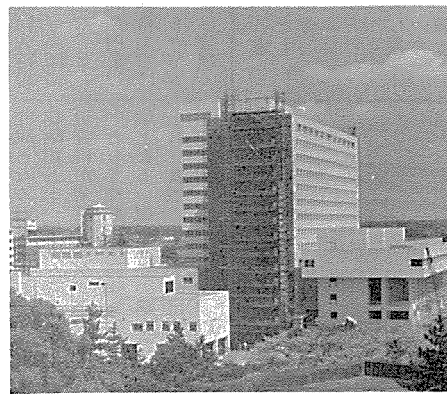


中山恒明教授御夫妻

新病院の建設進む

昭和四十八年三月に着工された
医学部新病院の建設は現在着々と
進捗中であり、このほのぼのはな
台上に瀟洒な姿で、地上十二階、
地下二階の全容を現わした。

本年度は玄関ホール
の完成、中診A棟(手術、生理、病理部門)
中診B棟(ICU、透視、放射線、R1病棟など)、中診D棟(検査、物療など)および病棟などの内部仕上げを含めた完成が予定され、さらに外来診療棟、母子センター、精神科病棟の工事が始まる。



（五一年五月現在）

医学部入学者決る

本年度の医学部(定員20名)の入学者は23名(男子12名(含外国人1名)女子11名)であった。出身県は北海道から沖縄まで23都道府県にわたっていたが、入学者数のベスト3は、東京都が65名と群を抜いており、以下千葉県12名、神奈川県9名であった。合格者の多い高校としては、開成(十一名)・麻生(六名)・武蔵(六名)・千葉・浦和・お茶の水女子大附属高校(各五名)などが目立っていた。

入学者氏名。新井 洋、ト部憲和

比留間 潔、黒木春郎、下山直人、小沢義典、白沢卓二、河野典博、荻野 尚、島田典生、中野のみ子、小川 真、吉田康秀、木下由彦、三上春夫、唐木章夫、亀山伸吉、齊藤幸雄、灘波 清、石津谷義昭、龍野 一郎、菊地洋一郎、山本恭平、豊泉惣一郎、岡田周市、岩井直路、堀田秀一、下山真彦、道具義孝、鈴木裕之、小森功夫、高梨秀樹、小田秀明、粒良幸正、関口真紀、幡野雅彦、津田 薫、早坂 章、高原正信、福沢 茂、岡嶋良知、渡辺 泰、西沢延宏、守月 理

医学部、学内事情十五ヶ月

学生自治会室捜査など

しばらく静かであった学園に学生自治会が再建されるのと同様にして、学生によるトラブルが頻発した。もちろん、昭和四十三・四四年の紛争とは、規模も内容もそのままだが、そのために医学部の教育研究が侵害されたことは事実で、その経過をここに要約して同窓会員諸氏にお知らせする。

①防衛医大問題(五十年一・七月一日) 23日、展濃氏(第一生理元助教)の防衛医大教授転出に関する抗議を、本間教授の研究妨害として行ったのが始まりで、その後自治会幹部となったNを中心とする十数名の学生が、2月10日から6月30日まで十回にわたり、本間教授の講義を妨害した。なかんずくNは極めて粗暴な態度で、いかなる説明にも耳をかさず、同一の抗議をくり返した。

山崎 勉、高井英一、吉野克正、小林 一夫、板橋 孝、山西友典、丹野隆明、白沢 浩、田中直美、和久真一、西尾武彦、安原一彰、滝沢史佳、春日井政博、久保田基夫、田中玲子、藤本尚也、田宮敬久、丸山尚嗣、山田和孝、福岡憲昭、阿部千鶴子、堤 明人、島谷博英、大貫洋子、山口清直、大沢一仁、中野邦夫、中沢 功、中村清吾、増山 茂、猪狩功造、太田真理、奥平笙子、大嶺 靖、江敏煌 (受験番号順)

じめとする一部学生の態度は、いよいよ尊大かつ執拗となり、ついに12月22日、橋教授に暴行し、さらに教授室を占拠しようとした。同教授室には試験答案その他の重要書類があり、やむなく市警の協力を得て教職員で退去させた。

③いわゆる「団結小屋」について(五十年一・三月)

香月医学部長は自ら学生の代表と会うことにし、その交渉を進めたい矢先、1月末日感冒および心疾患で病床に臥すこととなった。2月11日、医学部玄関前緑地に自治会闘争委員会の名で、ベニヤ板張りの半坪ほどの小屋が建てられた。彼等はこれを「団結小屋」と称した。病床の医学部長およびその病氣休養中の代理となつた井出医学部長事務代理の名で、再三撤去を勧告したが、彼等はこれを死守すると宣言したため、万一人身事故の発生を防ぐため、再びやむなく市警の応援を求め、3月25日教職員の手でこれを撤去した。

④西千葉地区における傷害事件と医学部自治会室の強制捜査(五十年五月)

5月11日、医学部自治会が主催した全国医学生集會は、医学部長室前庭にて3時間以上にわたる過大な音量によるマイク使用のため病院のみならず遠く市内の小中学校の授業にまで迷惑をおよぼした。その後西千葉地区にデモ行進し正門附近で教養部自治会と衝突、西千葉地区学生に負傷者が出た。この傷害事件の裏付け捜査の理由にて5月14日午前7時10分より約1時間にわたり医学部自治会室が

警察の手により捜査された。問題は決してこれで解決したとは言えないが、学生の大部分はそれ以降も冷静に勉学にいそしんで居り、五月中旬現在学内はやや平穏である。

編集後記

私たちがあたらしい編集スタッフに変わつたからの第2号をお届けします。今回この会報用のファイルと同時に送りできるのはさやかながら喜びです。印刷所の大変な協力があるため経費も安くファイルを作ることができました。大塚会長がしばしば言われる人間関係の大切さをここでも思いました。本号の発行が二週間程おくれたのは、次々と掲載しなければならぬニュースがとび込んで来るのでどこでしめくくりをつけるべきか迷つていたことにも原因があります。学生運動にかかわる流動的事態も記事の如くでしたが、よいニュースも残してしまいました。次号でくわしくとりあげる予定です。が、昭三卒の市川平三郎先生が国立がんセンター病院長になられたのも最近の喜びです。5月20日には国家試験合格者発表、本学は八六%にて全国平均八〇、四%に比べればよいでありますが、それでも一〇七名受験で十五名落ちています。5月19日夕多年同窓会のためにおつくり下さった銚子の片倉逸先生(昭11卒)が他界されました。本号印刷中のこととてここに大いそぎでお知らせできしはさみ心より御冥福を祈ります。次号は八月末発行の予定です。(M記)